
とある聖人の風紀委員

本日は晴天なり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある聖人の風紀委員

【Nコード】

N1212Z

【作者名】

本日は晴天なり

【あらすじ】

白井黒子や初春飾利が在籍する『風紀委員』^{ジャッジメント}の177支部。その支部長が上条さんと知り合いでしかも聖人で、能力者のクセに魔術使えて！？というそんなifの話です。最後までお付き合いいただけたら幸いです。更新はおそらく不規則だと思います。

第1章 何気ない日常（前書き）

初めまして。本日は晴天なりです。完全無欠の初投稿ですのでどうかお手柔らかにお願いします。あと、今回は魔術は出てきません。戦闘すらありません。とあるシリーズの時系列を順に追っていくので魔術の登場はもうしばらく先です。

第1章 何気ない日常

朝焼けが少年の寝ていたベッドを照らした。

「眠い…」

少年は自分の目にかかる朝日が鬱陶しそうにうつすら目を開け、二度寝を始めようとした。

寝起き直後のベッドは気持ちの良いものだ。

そうして再び睡魔に身を委ねようとした少年の枕元で携帯が鳴った。眠気眼を擦りつつ電話にでるとあめ玉を転がすような甘ったるい少女の声が聞こえてきた。

「支部長、朝早くから失礼します。今日、ちょっと約束があるのでお休みします。よろしくお願いします。」

少女の名は初春飾利。ここ、学園都市の学生による治安維持活動『ジャッジメント風紀委員』の活動支部177支部のメンバーだ。

そしてこの電話に出た少年がその177支部の支部長、かみのまこと神野真である。

ここは学園都市。東京都の3分の1ほどの広さに人口は230万。そのおよそ8割が学生の所謂『学生の街』だ。

この街は外周を壁で囲まれ、外との交通網なども遮断されている。しかも大小様々な教育機関が揃っているこの街は科学技術も外とはかけ離れている。具体的には2、30年くらいの差がついていると言われている。

この街の特徴はそれだけではない。この街では『記録術』とか『暗記術』とか、そんなものでごまかして

『超能力の開発』

を行っている。要するにこの街では『超能力』なんて言葉は当たり前なのだ。

しかし、それによる問題も発生してくる。なまじ超能力なんて手にしてしまったが故に調子に乗ったバカどもが犯罪に走るケースも多いのだ。

そこで設立されたのが『ジャッジメント風紀委員』と呼ばれる学生による治安維持部隊と、教師による『アンチスキル警備員』と呼ばれる治安維持部隊だ。

しかし、同じ治安維持組織のアンチスキル警備員とジャッジメント風紀委員だが、ジャッジメント風紀委員の活動内容は主に校内の揉め事の処理だったりする。これは大人たち曰く、『ジャッジメント風紀委員とはいえ子供。危険な目には合わせられない。』とのこららしい。

神野真は半分寝ているようなノロノロした動きで制服にきがえ、腕に緑と白のストライプで真ん中に盾のようなマークのあるジャッジメント風紀委員の腕章をつけ寮の部屋を出た。

ドアを開けた直後、隣の部屋の住人が神野の開けたドアにもろに激

突した。ガアアアン！！と凄まじい音が聞こえたので神野が覗き込んでみると黒い髪をツンツンに立てた少年が頭を押さえてうずくまっている。

「痛つてえ！！朝っぱらから不幸だ…」

この少年は上条当麻。神野の同級生で自称不幸な少年だ。しかし神野としてはこの少年、本人は鈍すぎて気づいていないがかなりの数の異性から好意を寄せられているため、どの辺が不幸なんだこのやろう、と問い詰めたい。

「ああ、ごめんごめん。」

と神野が謝っていると、

「？ああ、真か。」

と上条がつまらなさそうに言う。

「どういう意味だよ？おい、ため息つくなコラ。」

何故か上条が深いため息をついていた。

「いやね、なんかいつもお前がドア開けると俺がぶつかるから狙ってんじゃねえかと思つてさ…。」

ひどい冤罪だ。

「んな訳ねえだろ！！お前の不幸体質なんだからしょうがねえだろうが！！」

そう不幸。超能力ですら一般科学として認識されている学園都市。しかし、上条当麻の日常を見た人間はみなこう思うだろう。

（ああ、何だかんだ言つてどんなところでも不幸な人はいるんだな）
オカルト

と。そんなくらいに上条当麻という人間は不幸だった。タイムセー
ルをタッチの差で逃したり、買った漫画が真ん中のページだけぐし

やぐしやになつていたりは当たり前。

拳げ句の果てにはバス停にいるのに無視されたり、大金が入っている日に限って財布を落したりと上条の周りにいるだけで1日5回は上条の「不幸だあああ!!」という悲痛な叫びが聞こえるくらいだ。

まあ、傍目から見ている分には面白いのだが。

二人でならんでもいいような世間話をしながら学校に向けて歩いていると、ふと上条の動きが止まった。どうした?、と尋ねると上条は急に慌て出して、

「悪いっ!!俺ちよつと急ぐから!!じゃな!」

と言つてどこかへ走り去つていった。直後に

「逃げんな!!待てコラアア!!」

とかなんとか言いながら学園都市有数のお嬢様学校『常盤台中学』の制服を着た茶髪の少女が電撃を飛ばしながら上条が走り去つていった方向に走つていったのは見なかったことにしよう。

上条がどこかへ消えて1人歩いていると、目的地に到着した。ここが神野や上条が通っている高校である。

レベルもそこまで高いわけではなく、ごくごく一般的な学校を思い浮かべてもらつと良いだろう。

普段であれば制服姿の生徒たちは、今日は全員体操着だった。今日はこの学校でも『システムスキャン身体測定』が行われるからだ。

身体測定とは、有り体に言えば超能力のレベルを計るためのものである。学園都市の能力者は、全く能力の使えない無能力者（レベル0）から、低能力者（レベル1）、異能力者（レベル2）、強能力者（レベル3）、大能力者（レベル4）、そして最高位の学園都市230万人の頂点。7人しか存在しない超能力者（レベル5）の以上6段階がある。実質学園都市の学生の約6割が無能力者（レベル0）らしいが。

教室に向かう途中、女子更衣室のドアに張り付いている男子数名のつ男子同級生が廊下に出っ立っていた（もしくは張り付いていた）。

神野は苦笑いを浮かべつつ、近場のやつに何をしているのか聞いた。すると青い髪にピアスという格好の糸目のやつが首をギューン！！とこちらに向けてきた。首は痛くないのだろうか。

そいつはエセ関西弁で、

「なにゆうてはんの真っちゃんは！！今、たった今！！この中で女子が着替えとんねん！これを覗かぬ手はあるかいっ！！」
とか言っている。

残念ながらこの男。神野や上条の同級生である。いつも青い髪とピアスをしていることから「青髪ピアス」の愛称で親しまれている。ちなみに神野はめんどくさいので青髪と呼んでいる。

「青髪。んなことしてボコられても知らねえぞ？」

「女子の着替えを覗いて死ねるなら本望！！」

そのとき、ガラッと更衣室のドアが開き、中から体操服姿の同級生、

一般的な同年の女子より遥かに成長した胸部をもつが、性格の固さ故にどんな女も落とす上条ですら通用しない「対力ミジョー属性完全ガードの女」こと吹寄制理が出てきた。

一瞬にして固まる男子一同。吹寄は深い深いため息をつくとき、青筋を浮かべて主犯と思われる青髪に渾身の頭突きを喰らわしていた。

身体測定も終わり、神野は帰路についていた。結局上条は先程の少女に追い回されたらしく、大遅刻の末、未だに1人で身体測定をやっていることだろう。

「さつてと、今日は風紀委員も休み取ったしのんびりすつか。」とか思っていた神野だったが、ふと見た公園に見知った顔を見つけた。

朝に電話してきた風紀委員の初春飾利と、同じく風紀委員の白井黒子がベンチに座っていた。公園のなかはどうやら学園都市見学ツアーか何かの団体が賑わっているようだ。すると向こうもこちらに気づいたようで、軽く会釈してきた。

「よつ。なにやってんだ？」

「初春がお姉さまに会いたいと常々言っていましたので今日ご紹介してたんですよ。」

と白井が答えた。この白井の言う『お姉さま』とは、常盤台中学のEースで学園都市最強の超能力者（レベル5）の1人、御坂美琴のことだろう。

「私の同級生の佐天涙子さんも一緒なんです。」と初春が答えた。

「ほお。んで、その二人は？」

「先程そのクレープ屋に並びましたので、そろそろ戻ってくるのでは？」

「ああ、来ましたよ。」

見てみると初春と同じ制服を着た黒髪の長い活発そうな少女と、白井と同じ制服を着た同じく活発そうな茶髪で肩くらいまでの長さの髪の少女がこちらに向かってきていた。

その御坂美琴とおぼしき人物を見て思わず神野は苦笑いした。嬉しそうな顔でカエルのストラップを眺めている少女が、どう見ても今朝上条を追っかけていった生徒に見えたからだ。

そんなことは露知らず白井たちに二人の紹介をされ、続いて神野の紹介となった。

数分後、ベンチに座る初春と佐天の後ろに神野が立ち、納豆と生クリームของท็อปplingというどう見てもゲテ物な感じのクレープを御坂に食べさせようとする白井とそれを防ごうとする御坂の格闘を眺めていた。

「へえ、じゃあ神野さんは初春が入る前から風紀委員の支部長だったんですか。」

「ああ、一応中3に上がると同時にな。」

「最年少支部長として風紀委員ジャッジメントじゃ有名なんですよ。」

へえ、と佐天の羨望の眼差しに照れ臭くなった神野は視線をそらし通りを見て、

違和感に気づいた。

「どうしたんですか？」

「いや、どうしてあの銀行、昼間から防犯シャッター降ろしてんのかなんて思ったんだけど……」

そういった直後、防犯シャッターが内側から爆発した。

第1章 何気ない日常（後書き）

！
いかがでしたでしょうか。とりあえず平和な日常を書きたかった！

第2章 強盗、そして虚空爆破（前書き）

すいません。とある聖人の風紀委員と銘打ってるわりにしばらく魔術は出ません。最初はインなんとかさんの登場は4話位かな〜とか思ってたんですが下手したら6、7話くらいになりそうです。

第2章 強盗、そして虚空爆破

シャッターが爆発した。

公園で遊んでいた子供たちや、目の前のベンチに座っていた佐天などは一瞬何が起きたかわからないようだった。

しかし、神野、白井、初春の3人はすぐさま行動に移った。

「初春は警備員アンチスキルへの連絡と怪我人の有無の確認！！そのあと周囲の方の避難誘導を」

「わっ、分かりました！！」

「白井！！行くぞ！！」

神野と白井は柵を飛び越え強盗犯のグループへと駆けていく。

どうやら御坂もあとに続こうとしたらしいが、白井に大人しくしてると言われてしぶしぶ引き下がったようだ。

「ほら、さっさとしろよ！！」

強盗犯の1人が慌てた様子で残りの2人を急かす。
すると、目の前に

「風紀委員だジャッジメント（ですの）。器物破損、及び強盗罪の容疑で拘束する

（します）。」

と、神野と白井が道路から躍り出てきた。

「嘘だろっ！！何でこんな早く……」

強盗犯の1人の顔が強ばったが、よくよく見ればやって来た風紀委員ジャッジメンは2人。しかも1人は中学生の女子だった。

逃走は余裕と踏んだのか、強盗犯から下卑た笑いがこぼれる。

「ぎやははは、なんだよこのガキども！！」

風紀委員も人手不足か！？
ジャッジメント

明らかに見下した言いぐさだった。

「ほら、さつさと退かないと、怪我するぜえ！？」

そんなことを言いつつ強盗犯の1人が白井につかみかかるうとする。しかし、白井は余裕の態度を崩さずなんなくこれを避けると、

「そういう三下の台詞は、」

足技で男を転ばせ、太股に隠した金属矢ダーツで男を地面に縫い付けた。

「死亡フラグですわよ？」

「空間移動能力者！？
テレポーター」

縫い付けられた男の顔が驚きで染まる。

残りの2人を捕らえようとするが1人はどこかへ走り去っていく。

「白井！！逃がすんじゃないぞ！！」

「分かってますの！！」

すぐさまその男を白井が追いかける。おそらく白井の能力をもって

すれば捕まるのは時間の問題だろう。

彼女の能力は空間移動^{テレポート}。自分の体に触れている物体を瞬間移動させる能力だ。それは自分のからだとして例外ではない。つまり彼女に追われれば、座標さえわかればどこに逃げ込もうと無駄なのだ。

「さあつてと、あっちが捕まんのは時間の問題だし、あとはお前だけだ。」

そう言つて神野は目の前の強盗犯に目を向けた。先程2人を急かしていたところと、もっとも頭がキレそうに見えるところから、こいつが主犯であると判断する。

「やっぱ簡単には行かねえか…。」

そう言つて男は左手の平を空へ向けた。すると男の手の上に15cm程の火球が出てきた。おそらくこの男の能力だろう。

「発火能力者^{パイロキネシスト}…。」

思わず神野は呟いていた。しかし、直後、神野は嘲るようにハツと鼻で笑う。

「バカかお前は？何戦う前に手の内晒してんだよ？そういうのはギリギリまで見せねえもんだろ？」

神野の挑発に苛立ったのか、男は声を荒げて

「お前ちよつとはビビったり警戒したりしろよ！！強能力者（レベル3）だぞ！？」

と言つてきた。

しかし神野は相変わらず意地の悪そうな笑いを浮かべながら、

「ああ、確かにそれなりだわな。大方能力開発の途中で挫折してコ

レが限界だとか決めつけて拗ねてグレたクチだろ？」

「ヴっ！？」

どうやら図星らしい。

神野はさらにニタニタ笑いながら

「おいおい図星かよ！？もったいね。」

「っ！！黙れ！！」

どうやら強盗犯はこちらの挑発にのってくれたようだ。

神野が嗜虐心に満ちた顔をしていると、男が手の上にあった火球を放ってきた。

「まったく、危ねえだろうが！！」

口ではきつそうな声を出しておきながら横に跳んでしっかりと避けている。

「ホラよっ！！」

神野が掛け声を出し、左手を上から下へ下ろした。すると男の体が地面に急に倒れこんだ。

「っ！？何が！？」

「安心しろ。ちょっとお前の回りにかかっている重力を倍にしたただだ。」

そう。これが神野の能力。「重力操作^{グラビティ}」。指定した範囲の重力を地球の重力と比較して5%～500%まで変化させられる能力だ。能力のレベルは大能力者（レベル4）である。

「はあ、まったく手間かけさせんじゃねえっての。」

そう言いながら男に手錠をかけていると白井が裏通りの入り口から先程逃げた男をつれて出てきた。どうやらあちらも終わったらしい。

アンチスキル
遠くから警備員の車輛のサイレンも聞こえてくる。こうして難なく銀行強盗は解決した。

アンチスキル
警備員への報告を済まし、公園の方を見てみると、白井が御坂に抱きついている。

「全く、あいつも懲りないねえ。」

苦笑いを浮かべながら、神野は自宅へと向かっていった。

その帰り道。神野は見知った顔を人混みのなかに見つけた。

「おーい、当麻ー！」

「？ああ、真か。どうしたんだこんな時間に？」

「仕事だよ、し・こ・と。な〜んか銀行強盗が出やがってよ。捕まえたはいいいけどまた始末書出さなきゃな…。」

「相変わらず始末書書いてんのか。」

余計なお世話だ。

「まあな。そういうお前は？ああ、補習か。」

「おい、なんだその決めつけた言い方は。」

微妙にキレた上条を笑って受け流しつつ歩いていると、道沿いの植え込みから爆竹が爆ぜたような音が出て、わずかな煙が出ていた。

爆発音に驚いたらしい上条はビクツとして神野を見た。

「あ？誰か花火でも仕込んだのか？たく、たちの悪い…」

「いや…これは…」

神野は何故か考え込むような仕草をすると、

「悪い。先帰っててくれ。用事ができた。」
そう上条に言い残し、その場を去っていった。

「誰かいるか？」

神野は風紀委員第177支部に来ていた。先程の爆発。花火などを仕込んでいたとしたらその燃えカスが残っているはずだが、それがなかった。つまり、先程の爆発は『何もないはずの空間が突然爆発した』ということになる。

実はこここのところ似たようなことが多発していたのだ。爆発事態は小規模で怪我人こそいないが、いつまでも同じ威力とは限らない。つまり、いつ怪我人が出てもおかしくないのだ。しかし、手がかりがないかと思われたこの爆発事件、1つだけ共通点があった。爆発の直前に『重力子』の異常加速が観測されていたのだ。風紀委員全体ではこの重力子の異常加速を爆発の予兆であると断定し、怪我人を出さないよう活動していた。

「支部長？どうかされたんですか？」
そう言つて中から顔を出したのは固法美偉。

177支部に所属する強能力者（レベル3）の透視能力者である。

「さっきこの辺で重力子の異常加速、観測されなかったか？」

「え？ちよつと待つてください……ああ、確かに今から7分前に観測されてますね。爆発は小規模だったみたいですけど……」

その時、固法が見ていたパソコンに赤いアイコンが表示された。

「こ、これは……」

固法の顔が凍りつく。どうやら再び重力子の異常加速が観測されたようだ。

しかも、今回は今までとは文字通り桁が違う。

相当な規模の爆発になるだろう。

「っ！！早く現場に向かうぞ！！念のため盾持^{シールド}ってけ！！」

「了解です！！」

「場所は！？」

「第七学区のコンビニです！！」

「急ぐぞ！！」

神野と固法は支部から飛び出していった。

第2章 強盗、そして虚空爆破（後書き）

いかがでしょうか？次は虚空爆破事件です！！

第3章 重力子（グラビトン）（前書き）

寒くなってきましたね。先日見事に風邪ひきました（笑）

第3章 重力子（グラビトン）

神野は自分の部下の固法と第七学区のコンビニに来ていた。もちろん、買い物に来たわけではない。

「ジャッジメント風紀委員です。この場から早急に避難してください!!」

固法の一言で店に一気に緊張感が漂う。

「固法!!俺が爆弾探すからお前は避難誘導を!!」

「了解です!!」

神野はさらに店のなかへと入り込み、爆弾を探す。本来であれば何一つ緊張することなどなく買い物をするはずの店内は、異様な雰囲気包まれていた。クーラーは効いているはずだが、神野の顔は汗でじっとりと濡れていた。

「あの…うちの店で何か?」

「実はこの付近で重力子グラビトンの爆発的な加速が……………」

どうやら、向こうで固法が店主に事情を説明しているらしい。しかし、爆弾はいつこっに見つからない。

「クソ!!いったいどこに…」

苛立ち紛れに神野がさういうと、店の奥から短い悲鳴が聞こえてきた。見るとおさげの女子生徒が足を押さえている。どうやら転んだようだ。

「どうした!?!」

「すみません。足を…」

とりあえず爆弾探しは保留して女子生徒の避難を手伝う神野。しかし、女子生徒に肩を貸した直後、彼は絶望的な光景を目の当たりにする。

棚のしたにこの場に似つかわしくないファンシーなウサギのぬいぐるみが置いてある。そのぬいぐるみの前に直径数cm程の黒い丸ができたかと思うと、その黒い丸にぬいぐるみが吸い込まれていくのだ。メキメキメキ！と異常な音を立ててぬいぐるみが吸い込まれていく様はそのぬいぐるみ自体が異常な物であることを表しているかのようなだった。

「何！？これが…爆弾！？」

間に合わない！と判断した神野は女子生徒に覆い被さり、庇おうとした。

直後、ダイナマイトでも投げ込まれたかのような爆発がコンビニ内で起こった。

固法美偉は店長と自分を持っていた盾で^{シールド}庇い、爆発をやり過ごしていた。爆風が収まると店内を駆ける。奥を見るとおさげの女子生徒がへたへたと座り込んでいる。

「君！！大丈夫！？怪我は？」

すると女子生徒は怯えたような目をして必死に言葉を紡いだ。

「わ…私はこの人が庇ってくれた…から。で…でも……。」

固法は地面を見ると、そこにあったのは上司の神野が血塗れで倒れ

ている姿だった。

神野は目を覚ますとまず白い天井が目に入った。どこだ？と思い、首を巡らすと、大きな窓から青空がのぞいている。どうやら病室のようだ。

「おや？目が覚めたようだね？」

声がした方に目をやると、カエルに似た顔つきをした医者が立っている。自分でもカエルに似ている自覚があるのか、名札にはカエルのマスコットのシールが貼ってあった。

「冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）……」

神野はこの医者を知っていた。

生きた人間ならどんな状態だろうと助け出すことをモットーに、こんな見た目ながら確かな腕を持っている。故についたあだ名が『冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）』と言うわけだ。

神野は冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）に体調についてなど二三質問に答え、先程の虚空爆破事件について聞いた。

彼もあまり詳しくは知らないようだったが、現場の遺留品が少なく、手がかりになるようなものはないこと、学園都市の超能力者の情報を集めた書庫バンクに照合をかけた結果、重力子の異常加速これが出る能力の『量子変速』シンクロトロン、しかも爆弾にできるような、つまり大能力者（レベル4）以上の人物が1人、浮かんだらしいが、その能力者「くしろ かたひら鉤路帷子」は8日前から原因不明の昏睡状態に陥っており、犯行は不可能だろう、ということなどを聞いた。

つまるところ、捜査に進展が何も無いのだ。

「すみません。無理を承知で言ってるのはわかってます。ただ、ここでじっとしてるのは性に合わないんで。もう一度事件を一から見直したいんです。」

気がつけばそんな言葉が口からでてきた。冥土歸し（ヘヴンキャンセラー）は、一瞬驚いたような顔をしたが、快く了承してくれた。

10分後神野は、病院内の携帯電話使用区域のベンチに座り、膝に置いたノートパソコンとにらめっこしている。その目は真剣そのものだ。

「遺留品は少なく、サイコメトラ読心能力者の読み取りも不可。バンク書庫にも該当する能力者はなし……か。」

正直、彼はかなり焦っていた。また自分のように爆発に巻き込まれる同僚が出てくるかもしれない。そう思うといってもたってもいられなかった。

（クソっ！！同僚が8人も傷ついてるのに打つ手なしかよ！！）

そう1人心のなかで毒づいた。しかし、彼はそこに何か引つ掛かるものを覚えた。

（8人！？いくらなんでも多すぎねえか？）

自分を含めれば9人もの風紀委員が傷付いたことになる。ジャッジメント過去に起きた虚空爆破事件は8件。グラビティンそれで負傷した風紀委員は自分を含めて9人。ジャッジメント過去に起きた全ての事件で風紀委員が負傷している。偶然とは考えにくい。

（ま、さか…犯人の狙いは…）
いやな想像が神野の中で浮かぶ。

その時、神野の携帯が鳴った。電話に出ると支部にいる白井のようだった。

「どうした？」

グラビトン

『また、重力子の異常加速が観測されましたの。』

神野の肩がピクツと動いた。

「場所は！？」

『第七学区の洋服店、セブンスミストですの。ちょうど初春がそちらにいたようなので彼女に避難誘導を…』

一瞬、神野は自分の頭が真っ白になったのを感じた。はっとして、大慌てで白井に指示を出す。

「白井！！初春に早く連絡を！！あいつが危ねえ！！」

白井はいきなりのこととで事情が飲み込めないようだった。

『？どうしたんですの？』

グラビトン

ジャッジメント

「過去の虚空爆破事件7件で、俺を含めた風紀委員が計9人も負傷してる！！これはどう考えても偶然じゃねえ！！」

携帯越しに白井が息を飲むのがわかる。

『つまり、この事件は無差別に起きたのではなく、

ジャッジメント

観測値点周辺の風紀委員を狙つての犯行、

今回の標的は初春ということですよ！？』

「おそらくな！！早く連絡して初春にそこから避難するよう言つて

くれ!!」

り、了解ですの、という一言と共に通話が切れる。神野は空を見上げ、自分の部下の無事を祈り、意を決して怪我をしたからだを引きずって現場へと急いでいく。

第3章 重力子（グラビトン）（後書き）

本来だったら3話目で虚空^{グラビトン}爆破事件については終わらせようとしたんですが、思ったよりも長くなってしまいました…。小説って難しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1212z/>

とある聖人の風紀委員

2011年12月5日23時09分発行